1900

New Design for a New Way of Life

III 版画復興とグラフィックの刷新

The Prints Revival and Innovation of Graphic Arts

19世紀における写真の発明は、それまで視覚情報の複製や記録といった役割を担ってきた版画の存在意義を大きく揺るがし、芸術としての版画への模索という動きを生み出しました。その際に積極的に参照されたのが、当時西欧で大きなブームとなっていた日本の多色木版画です。作品として制作された版画は、絵画に比して廉価ということもあり、広く人々の生活を彩ることになりました。本章では、木版画やリトグラフなど多様な版画手法における新たな試み、そしてその試行錯誤がうかがえる素描の魅力を紹介します。

IV 新しい生活へ

Towards a New Way of Life

グラフィックにおける新たな試みは、当時盛んに刊行された美術雑誌や挿画入り雑誌だけではなく、様々な媒体を通して人々の生活へと浸透していきました。日々新しいグラフィック・デザインに触れること、それは生活における新たな意識を生み出すことにも繋がりました。本章では、ポスターやカレンダー、蔵書票といった日常生活に関わるグラフィックの新たなデザイン、そしてグラフィックの刷新を担った人々がてがけた書籍の装丁や挿画の魅力を紹介します。

ウィーン総合芸術展「クンストシャウ」でのベルトルト・レフラーによるポスター展示風景 1908年

分離派メンバー、第14回展覧会に際し撮影（左からアントン・スターク、グスタフ・クリムト（椅子に座る）、コロマン・モーザー（ハットをかぶる）、アドルフ・ベーム、マキシミリアン・レンツ（横になる）、エルンスト・シュテール（ハットをかぶる）、ヴィルヘルム・リスト、エミール・オルリク（座る）、マキシミリアン・クルツヴァイル（キャップをかぶる）、レオポルト・シュトルバ、カール・モル（横になる）、ルドルフ・バッハー）モリッツ・ネー工撮影

❶『ヴェル・サクルム：オーストリア造形芸術家協会機関誌』1898年1月号 ❷コロマン・モーザー《11月》『ヴェル・サクルム』第5年次のためのオリジナル版画）1902年 ❸グスタフ・クリムト《右向きの浮遊する男性裸像》（ウィーン大学大広間天井画《哲学》のための習作）1897-99年 ❹グスタフ・クリムト《ウィーン分離派の蔵書票》1900年頃 ❺『エゴン・シーレの素描』1917年（発行：リヒャルト・ラニィ書店）❻フェルディナント・アンドリ《天使と二人の人物》1905年頃 ❼オスカー・ココシュカ《山羊で羊といる少女》1906-08年 ©Foundation Oskar Kokoschka/JASPAR, Tokyo, 2019 G1689 ❽ベルトルト・レフラー編『ディ・フリッヒェ（平面）―装飾デザイン集（新シリーズ）第Ⅱ巻』1910-11年 ❾コロマン・モーザー著『画『平面装飾』（『ディ・クヴェレ（泉）』第3巻）1902年 ❿イレーネ・シャシュル《題名不詳》（ウィーン工房編『ウィーン・ファッション1914/15』より）1914/15年 ⓫アドルフ・ロース《アームチェア》1904年頃 武蔵野美術大学蔵 ⓬カール・モル《ハイリゲンシュタットの聖ミヒャエル教会》1903年 ⓭ルートヴィヒ・ハインリヒ・ユンク『ッケル《三羽の青い鸚鵡》1909年頃 ⓮エルンスト・シュテール《湖》1906年頃 ⓯カール・モル版画集『ベートーヴェンの家』1908年（装丁：ヨーゼフ・ホフマン、ウィーン工房）⓰『1909年ウィーン市舞踏会、1809年の開催日を記念して』1909年（画：レミギウス・ガイリンク）⓱⓲『キャバレー〈フレーダーマウス〉上演本』（表紙 第1号：カール・オット！チェシュカ、第2号：モーリッツ・ユンク／装丁：カール・オット！チェシュカ）1907年 ⓳フランツ・フォン・ツューロウ『月刊帳』1915年3月版 ⓴ルキアノスの遊女の対話』（表紙デザイン：グスタフ・クリムト、ヨーゼフ・ホフマン／装丁：ウィーン工房）1907年 *所蔵の記載のないものはすべて京都国立近代美術館蔵